

猫の 腎臓病



文：三品美夏 監修：渡邊俊文
麻布大学附属動物病院 腎泌尿器科

Contents

猫の腎臓病

文：三品 美夏（麻布大学附属動物病院 腎泌尿器科）
監修：渡邊 俊文（麻布大学附属動物病院 腎泌尿器科）
イラスト：カミヤマリコ デザイン：メルシング

はじめに…3

第1章



腎臓の働きと病気

1 腎臓は何をしているの？	5
腎臓ってどんな臓器？	6
腎臓の働き	7
2 腎不全ってどんな病気？	8
3 急性腎不全とは	9
4 慢性腎不全とは	10
病気のサインに要注意	11
悪化してくると	12
5 慢性腎不全の原因は？	13
6 どのように慢性腎不全を診断するの？	15
まとめ	16

第2章



腎臓病とつきあっていくためには

1 慢性腎不全の治療法は？	18
早期から行う治療	19
病期が進んでからの治療	20
Column — 静脈点滴vs皮下補液	21
まとめ	22

第3章



日常生活での注意点

1 飼い主がお家でできることは？	24
薬の目的を理解しよう	25
急激な環境変化はNG	26
動物病院で処方される一般的な薬や療法食	27
2 慢性腎不全は予防できるの？	28
定期検診が大切です	29
まとめ	30
猫のお薬 飲ませ方&使い方テクニック	31
Q & A	32



はじめに

高齢の猫に最も多い病気のひとつが慢性腎不全です。腎臓は予備能力が高い臓器のため、よほど悪くならないとなかなか症状が現れません。つまり、症状が現れたときには、かなり腎臓機能は悪化していると考えてよいでしょう。

しかし慢性腎不全は、特に目立った症状もなくゆっくりと進行していくため、飼い主の方もなかなか気が付かず経過してしまうことも多くあります。そのため、慢性腎不全を初期の段階で発見して、病院に連れて行くことがどうしても遅れがちになってしまいます。すなわち、飼い主の方が体調の悪さに気がついたときには、すでにかなり病状が進んでいるといった場合が少なくありません。

腎臓の組織は一度壊れてしまうと、簡単に修復したり、再生したりすることができないため、慢性腎不全の状態に陥ると、残念ながら完治することは望めません。しかし、早くから治療することによって進行を遅らせることは可能です。そのためにも、慢性腎不全の原因となる腎臓病を早期に発見してあげることがとても重要なのです。また、飼い主の方が慢性腎不全の病態をしっかり理解し、獣医師と十分にコミュニケーションをとりながら治療に参加し、日々のお家での看護を行うことがとても大切になります。

第 1 章

腎臓の 働きと病気

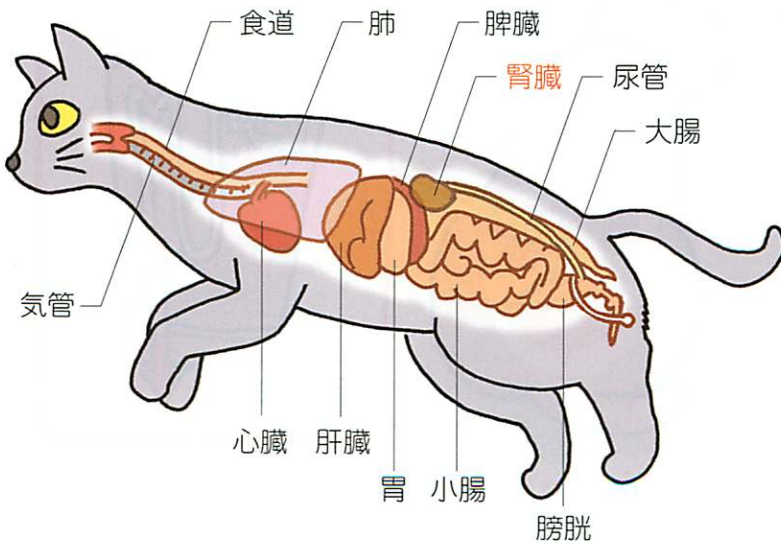




腎臓は 何をして いるの？

1

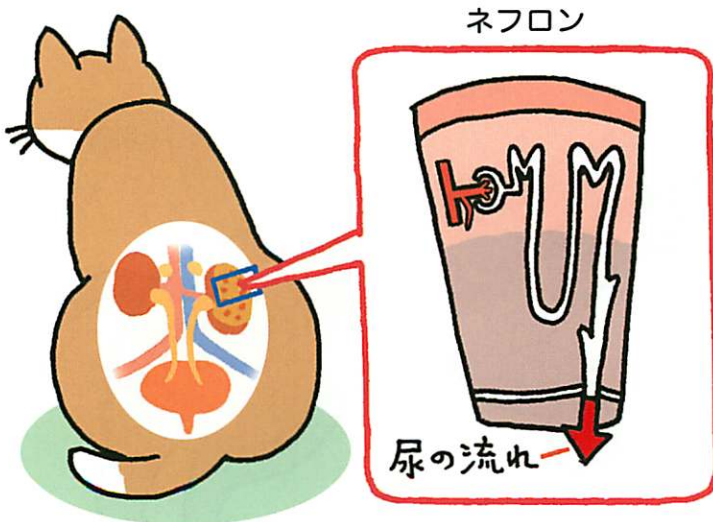
腎臓の働きと聞いて、はじめに思いつくのは「尿：おしっこ」を作るところということだと思います。では、腎臓は尿を作ることによって何をしているのか？ また、それ以外にどんな仕事をしているか？ について述べてみます。



腎臓ってどんな臓器？

腎臓は一对の臓器で、“体の中を健康な状態に保つため”に仕事をしています。特に大切なのは、腎臓では体の血液を濾過して、おしっこが作られることです。このおしっこによって体にとって不必要な老廃物が排出され、体の中に毒素がたまらないようにしています。

肉眼では確認できませんが、腎臓は“ネフロン”と呼ばれる単位が集まってできています。猫の腎臓には1個あたり20万個のネフロンがあり、腎臓の主な働きはこのネフロンで行われているのです。



ネフロン：猫の腎臓には1個あたり20万個のネフロンがあります。



腎臓の働き

(1) 老廃物の排泄	腎臓は体で作られ出された老廃物を水分と共に濾過し、尿として排泄します。
(2) 水分の調節	腎臓は濾過した水分を必要に応じて再吸収し、尿の濃さや量を調節して、体内の水分量を一定に保とうとします。
(3) 電解質（ミネラル）のバランス調節	腎臓は尿を作る際に、生命を維持する上で不可欠な働きをしている様々なミネラルの濃度を調節しています。
(4) 酸塩基平衡のバランス調節	腎臓は体液の酸とアルカリの排泄を調節して、弱アルカリ性に保っています。
(5) 造血ホルモンの分泌	腎臓は骨髄に赤血球を作る指令を出すホルモンを分泌しています。
(6) 血圧の調節	血圧は様々な要因によってコントロールされていますが、腎臓も血圧の調整に深く関わっており、血圧上昇に重要な物質が分泌されています。
(7) ビタミンDの活性化	食物から摂取されたビタミンDを腎臓で活性化し、腸管からのカルシウム吸収や骨の代謝に重要な役割を果たします。

腎臓は、このように生きていく上でとても重要な働きをしているのです。

腎不全って どんな 病気？

2

実 は腎不全は本来病気の名前ではありません。腎不全とは「何らかの原因によって腎臓の機能が低下した状態」のことを指します。腎不全には「急性腎不全」と「慢性腎不全」があります。

Column — 慢性腎不全と慢性腎臓病

人の医療の現場では数年前から「慢性腎臓病（CKD：Chronic Kidney Disease）」という新しい概念が定義づけられ、この用語が使われるようになってきました。犬や猫など動物では明確な定義はまだできていませんが、「慢性腎臓病（CKD）」という言葉は獣医療においても人と同様に使われつつあります。

今までよく聞いていた「慢性腎不全」という言葉と「慢性腎臓病」はどこが異なるの？と疑問に思われると思います。「慢性腎不全」は色々な腎臓病が数ヶ月から数年の経過で進行していく中で腎臓機能が低下し、体の内部環境の恒常性を維持できなくなり、何らかの臨床症状が発現することを言います。これに対して「慢性腎臓病」は、病名に関わらず、タンパク尿や血液検査、画像診断などで確認された腎臓障害、または糸球体濾過量（腎臓の仕事量）が健康時の約60%以下となる腎機能低下が3ヶ月以上持続する状態を指す言葉です。つまり、「慢性腎臓病」は腎障害があっても症状が全くない場合もありますし、さらに、この状態を放置したままにしておくと、末期腎不全や心臓・血管の病気の危険性が高くなるのが危惧されています（注：これはあくまでも人での定義です）。

「慢性腎臓病」という言葉は、今後徐々に浸透していく言葉であるとは思いますが、現在の段階では動物医療の現場で「慢性腎臓病」の明確な定義がされていないことに加え、新しい用語であること、またペットオーナーの皆さまが聞きなれない言葉であることから、本冊子では今まで聞きなれている「慢性腎不全」や「腎臓病」という用語を使用しています。



急性腎不全 とは

3

「**急**性腎不全」は急激に、短期間（数時間または数日単位）で腎機能が低下した状態です。腎臓で尿を作る働きが停止してしまうため、無尿や乏尿とよばれる状態に陥ります。急性腎不全の原因には、

腎臓に十分な血液が流れない

重度の脱水、出血、血圧低下、心臓病（心不全）など

腎臓組織そのものが障害を受ける

免疫反応による腎炎、腎毒性物質による中毒*や感染など

尿の流れが閉塞する

尿管結石や雄猫特有の尿道閉塞

といったことが挙げられます。

急性腎不全は、急激に重篤な症状（嘔吐、下痢、虚脱、痙攣など）がみられることが特徴です。早急に原因をみつけ、積極的な治療を行えば、腎機能の回復を望める場合もありますが、最悪発症して数日で死亡することもありますし、回復してもそのまま慢性腎不全へ移行する場合も少なくありません。

*猫は誤飲による中毒は起きにくいのですが、飼主が自分の判断で与えてしまった市販薬や、毛に付いた薬品を舐めとった際に中毒を起こすことがあります。

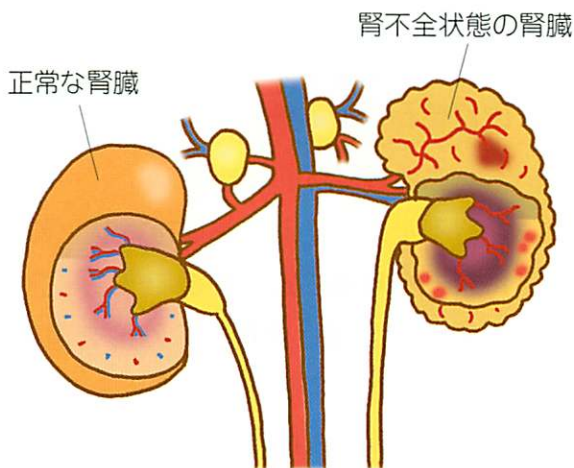
慢性腎不全 とは

4

「慢性腎不全」は、腎臓の病気が慢性的に進行することによって、長い時間かけて腎臓機能が低下し、「腎臓の働き」が徐々に失われていきます。

腎臓の主な働きのひとつは、尿中に老廃物を排泄することですが、腎不全になると、このような働きがうまくできなくなります。つまり、血液中の老廃物を「濾過」する働きや、体に必要な水分を「再吸収」する働きが低下してしまいます。

このため、水分を捨てすぎて脱水症状になったり、血液中に毒性のある不要物がたまって障害を起こしたりします。



腎不全を示す腎臓



病気のサインに要注意

最もよくみられる症状は、**元気消失**、**食欲低下**、**体重減少**などですが、老齢の猫であれば、このような症状が少しずつみられるのは仕方がないと思われ、見過ごされがちです。また、**「多飲多尿」**つまり「よく水を飲み、たくさんおしっこをする」といった、一見問題がなさそうな症状が病気のサインであったりします。薄いおしっこが大量に出るので、猫独特の尿の臭いもなくなってきます。必要以上に尿が出るため、お水をたくさん飲んでいるはずなのに、実は体には水分が足りない**「脱水状態」**になっていることも多いのです。



元気消失



食欲低下



多飲



多尿

よくみられる症状

悪化してくると…

慢性腎不全が悪化していくと、毛づやが悪くなり、筋肉も落ち、行動が緩慢になって、よく寝ていることが多くなってきます。さらに体内に老廃物がたまって吐き気が出てきたり、食欲不振が続いたりします。さらに、口の中に潰瘍ができ口臭がひどくなる、下痢や便秘といった症状がみられるようになります。また、貧血になったり、網膜はく離になったりと、直接腎臓とは関係ないような症状もみられることもあります。

慢性腎不全は時間と共に進行し、体を維持する腎機能がなくなってしまうと「尿毒症」という状態に陥り、最終的には死を迎えてしまいます。



毛づやの悪化



よく寝ている



嘔吐・食欲不振



貧血



慢性腎不全 の原因は？

5

慢性腎不全を引き起こす腎臓病には色々なものがあります。が、はっきりとした病名が分からない場合も多くあります。老齢の猫でみられる腎臓病の多くは腎炎と呼ばれるものですが、その他、腫瘍や先天性、遺伝性の腎臓病といった場合もあります。大きな病気がなくとも、年を取ると若いときより腎機能が少しずつ低下していきます。

また、腎臓に悪影響を及ぼす増悪因子というものが存在すると、腎臓病を起こすきっかけになります。例えば、様々なウイルス感染や細菌感染が関与する場合があります。さらに過去の尿路疾患や腎結石、尿管結石、またオス猫特有の尿閉によって腎臓にダメージが加わった後遺症が残る場合もあります。

Column — 猫と睡眠

猫の語源は「寝子（ねこ）」という説があるほど（諸説あります）、お家の猫ちゃんは1日の大半を寝て過ごします。さて、猫ちゃんにも人と同様に「レム睡眠（浅い眠り）」と「ノンレム睡眠（熟睡）」があります。猫ちゃんの睡眠の多くは浅い眠りなので、ちょっとした物音でもパツと起きることができます。また、寝ながら耳やヒゲがピクッと動いたり、手をムニュームニュー動かしたり、「ニャ」と寝言を言ったりしますが、こんな時は夢を見ているのかもしれないね。健康な場合は寝すぎていても心配はありませんが、元気や食欲がなくなり寝てばかりいるといった場合には、病気が潜んでいることもあるので注意しましょう。

慢性腎不全の原因

先天性の病気	腎形成不全、腎欠損
遺伝性の病気	多発性嚢胞腎（ペルシャ系）、 アミロイドーシス（アビシニアン）
老齢性変化	加齢に伴う萎縮腎
腎臓の腫瘍	リンパ腫、腎臓癌
慢性腎炎	糸球体腎炎、間質性腎炎、腎盂腎炎
過去の病気の 後遺症	過去の腎毒性物質の曝露、尿路閉塞、 尿路結石、感染症
ウイルス感染症	猫伝染性腹膜炎（FIP）、 猫白血病ウイルス感染症（FeLV）、 猫免疫不全ウイルス感染症（FIV）

慢性腎不全が発見される頃には、最初の原因が分からなくなっていることも少なくありません。

Column — 猫の味覚

私達が物を食べて「甘味」「苦味」「塩味」「酸味」「うま味」といった味が分かるのは、主に舌にある「味蕾」と呼ばれる味のセンサーがあるためです。このセンサーは人より数が少ないですが犬や猫にもあります。犬はこれの中で「甘み」に最も敏感で、猫は「甘み」に鈍感です。これは犬が炭水化物を必要とする雑食動物なのに対して、猫が肉食動物であることを意味します。つまり、猫は肉に含まれるアミノ酸と脂肪分に対して嗜好性が高いため、炭水化物の甘さを感じする必要がないのです。また、猫が「苦み」を非常に嫌うのは、腐敗した肉や毒物を口にすることを避けるためだと考えられています。また、味覚がそれほど発達していない猫にとって、食事は匂いや風味、舌触りや食感が大切で、やや温かいものを好みます。冷蔵庫から出したばかりの冷たい食事では味気ないのです。

どのように慢性腎不全を診断するの？

6

臨 床症状から慢性腎不全が疑われると身体検査、尿検査、血液検査、画像検査（レントゲン・超音波検査）などを組みあわせて診断を進めていきます。一般的に、**血液検査**では血中尿素窒素（BUN）と血清クレアチニン（Cr）を指標にしますが、これらは腎臓機能が75%以上障害されてからでないと異常値を示しません。**尿検査**においては、比重や蛋白などが重要視されています。これらの検査は定期的に受けることが大切です。尿検査で発見される異常の方が、血液検査よりも早くに腎臓の異常を検出できる可能性があります。腎臓の大きさや内部構造の異常などは、血液検査や尿検査では分かりませんので、**画像診断**が適しています。それ以外にも慢性腎不全の原因

を確実に突きとめるために、**組織検査***などが行われることもありますし、目の症状があれば、**眼底検査**や**血圧測定**をすることもあります。



※行った方が良い場合と、してはいけない場合があります。

まとめ

慢性腎不全では、壊れたネフロンがあっても健康なネフロンがそのぶんも働いているため、なかなか症状があらわれません。

飼い主さんが気付くような症状が出る頃には、すでに腎臓機能の75%が失われているといわれています。慢性腎不全の症状の多くは病気が進行している状態でみつかっているのです。

慢性腎不全では、血液検査よりも尿検査の方が異常が早く発見される可能性も指摘されています。早期発見のために定期的な検査をお勧めします。



初期
症状はほとんどなし



中期
食欲や水を飲む量、尿に変化があらわれる



末期
嘔吐や貧血など様々な症状

第 2 章

腎臓病と
つきあっていく
ためには



慢性腎不全 の治療法は？

1

慢性腎不全は残念ながら完全に治ることはありません。では、治らないとするならば、何を目標に治療をするのでしょうか？ そしていつから治療をはじめればよいのでしょうか？

腎臓病の原因が明らかに分かっている場合（感染や腫瘍，結石など）には，それに対する積極的な治療を行います。原因がよく分からない場合でも，**できるだけ早くから治療を行うことによって腎臓の機能が悪化していく速度を抑える**ことができると考えられています。

先にも述べましたが腎臓は，一度障害を受けて機能を失ってしまった組織が再生することは期待できません。また，機能を失った組織が行っていた仕事をまだ残っている正常な組織で行うことになるため，正常な組織は通常よりも仕事量が増えてしまい，さらに腎臓が悪くなるといった悪循環に陥ります。ですから，慢性腎不全の初期の治療目的は，**残っている正常な腎臓組織にできるだけ負担をかけないようにすること**なのです。

例えば**食事**は，腎臓の負担になりやすいタンパク質やリン，

塩分などを抑えたものに切り替えます。ただし、ただタンパク質を制限すればよいかというとそうではありません。猫は元々タンパク質の要求量が多いので、極端な制限は避けなければいけません。さらに、脂肪酸の変更や抗酸化物質などが添加されていることが重要になります。そのため、慢性腎不全の猫に対しては、腎臓用の

療法食に切り替えることが現時点では効果的であるといえます。その他、必要に応じて不足がちなビタミンやミネラルなどを補います。



早期から行う治療

それでも体にはどうしても老廃物がたまってきます。そのため、人でも使用されていますが、尿毒症の原因となる老廃物の一部を腸管で吸着し、便とともに排出する**吸着剤**を投与して少しでも症状が軽減されるようにします。

その他、慢性腎不全を進行させる原因となるものを抑えるような薬を服用して、できるだけ腎臓にかかる負担を軽くしていきます。例えば、タンパク尿が強く出ている場合には、降圧剤の一種で尿中タンパクがもれ出てくるのを押さえるような作用

のある薬（ACE阻害剤）や、免疫を抑える薬などを投与します。高血圧がある場合には、血圧をコントロールする降圧剤の投与が理想的です。また、慢性腎不全では体にリンが蓄積していくのでリン吸着剤を与えることもあります。

病期が進んでからの治療

また、腎臓は尿を作る以外にも様々な働きをしていますが、その働きも慢性腎不全の進行とともに悪化し、症状が現れるので、それに応じた治療も行われます。例えば、貧血といった症状がみられれば、ビタミンやミネラルを補ったり、造血ホルモン製剤の注射を行ったり、場合によっては輸血が必要となってくるでしょう。

さらに、慢性腎不全の病状が進行していくと、様々な症状がみられてきます。このときには、対症療法といって、例えば吐き気があれば吐き気止めの薬剤、食欲不振なら食欲を高める薬剤を投与するといった症状にあわせた治療を行います。また、慢性腎不全の猫が十分に水を飲まないと、あっという間に脱水状態になり、腎機能がさらに悪化する事態となります。このため、定期的な病院での輸液治療が重要になります。輸液療法には血管から時間をかけてゆっくり点滴を行う方法（静脈点滴）と、皮膚の下に必要な輸液剤を注入する方法（皮下補液）があります。場合によっては、飼い主の方に皮下補液を実施して頂くこともあります。これとは逆に、体に水分やカリウム・ナトリウム等が余分にたまってくる場合には利尿剤を使用します。

Column — 静脈点滴 vs 皮下補液

体に水分やミネラルを補充する治療を輸液療法といいます。

輸液療法は血管に特殊な細い針を留置して、直接血管の中に輸液剤を投与する静脈輸液（点滴）と皮膚の下の組織に輸液剤を注入する皮下輸液（補液）があります。

静脈点滴は必要な水分が直接血管内に入るので、最も効果が早くあらわれる輸液療法です。しかし、血管の中に点滴できる量とスピードは決まりがあり、必要な水分を補給するのにどうしても時間がかかりますので、入院での治療が必要になります（半日～数日）。また、静脈輸液では静脈に炎症が起きて、少しずつ使える血管がなくなっていくという欠点があります。

皮下補液は短時間で必要な水分量の輸液剤を皮下に入れる方法です。ヒトとは異なり猫ちゃんの皮下は緩く^{ゆる}余裕があるため、比較的たくさんの量の輸液剤を注入することができます。時間があまりかからないため、通院（外来）でも行うことができます。皮下補液する場所は、基本的に背中の部分で、皮下補液をするとそこが膨らみます。まるでラクダのコブのようになるので、はじめはビックリされるかもしれませんが、背中のふくらみは、時間の経過と共に前胸や前足などに液体が移動してくることもあります。水分が吸収されるにつれて数時間かけて徐々に消えていきます。皮下に補充した輸液剤が時間をかけて徐々に血管へと吸収されるため、効果は比較的ゆっくりとあらわれます。また、特殊な機材を必要としないため、場合によってはお家で飼い主の方が行うことも可能です。自宅で皮下補液をするには、かかりつけの獣医師からきちんと方法を教えていただくことが大切です。

慢性腎不全の病態は適切な輸液療法が必要になります。入院治療はどうしても猫ちゃんにストレスがかかりますし、飼い主の方の負担も大きくなります。具合が悪くなってから入院して静脈点滴を行うのではなく、体調悪化していなくても定期的に皮下補液をすることが慢性腎不全の猫ちゃんには、とても有効な治療法といえるでしょう。

ただし、脱水がひどく緊急性を要する場合や輸液剤の種類によっては、静脈輸液でなければ行うことができませんので、必要に応じて使い分けることが大切です。また、自宅で皮下補液を行っていても定期的に動物病院で問題がないかチェックしていただくことが大切です。

まとめ

腎臓は一度障害を受けると再生が難しい臓器です。従って、残っている正常な腎臓組織に負担をかけないようにすることが肝心です。食事の切り替え，薬の投与など，獣医師の指示に従って，適切なケアを行ってください。



第 3 章

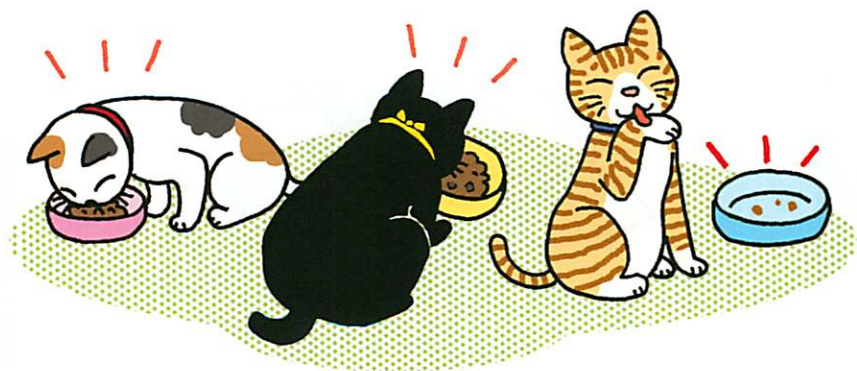
日常生活での 注意点



飼い主が お家でできる ことは？

1

お家では、猫に対して水が飲める場所を複数用意し、**水を絶やさない**ことが大切です。水分を取りたがらない猫の場合は、食事に水を加えたり、ウェットタイプの食事に変更したりしてもよいでしょう。また、**痩せてしまうことも慢性腎不全の猫にとっては大敵**です。十分なカロリー摂取ができるように食事量を調整してください。体調が悪くなると食欲が落ちて





しまいます。そのような場合は、当然動物病院での治療が必要ですが、お家でも食事はフレッシュなものを温めて少しずつ与えてみるなどの工夫をしてみましょう。かかりつけの獣医師に相談し、嗜好性のよいフードを与えてみてもよいかもしれません。食事に嫌な印象を与えないようにしましょう。

薬の目的を理解しよう

お薬は、症状が悪化するほど必要な薬が増えることを認識しておかなければなりません。処方された薬は、その投与目的を知っておくことが大切です。食欲もありませんので、食事に混ぜるといった方法では対処できないこともあります。できるだけ上手に飲ませる工夫を心がけましょう。どうしても飲ませられない場合には、自分の判断で薬を勝手に中止せず、かかり

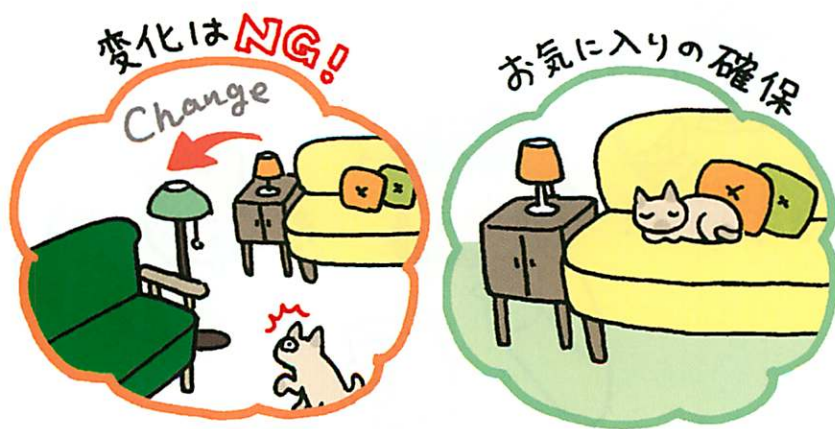


つけの獣医師に相談しましょう。

サプリメントやホリスティックケアなど色々と試してみたい気持ちもあると思いますが、かかりつけの獣医師に意見を伺ってから行った方が良いでしょう。

急激な環境変化はNG

健康なときと比較して、急激な環境の変化ですぐに体調を崩すこともありますので、**できるだけ生活環境を変えない**ようにしましょう。季節の変わり目にも注意してください。たいていの猫はお気に入りの場所があるはずですので、そこはしっかり確保しておいてください。尿の回数が増えるので、**トイレはいつもきれいに**しておくことを心がけてください。





動物病院で処方される一般的な薬や療法食

慢性腎不全の猫ちゃんに対して、動物病院からは病期や症状にあわせて以下の薬剤等が処方されることがあります。

それぞれの特徴を理解した上で、与えることが大切です。

ACE阻害剤…血管を広げて血液が流れやすくし、血圧を下げるお薬です。腎臓病の猫ちゃんでは腎臓の中（糸球体）の血圧が高くなっていることが多いため、腎臓を保護するために処方されます。糸球体の中の血圧が高いままだと、尿中に蛋白が漏れでることがあります。

吸着剤…食事に含まれている尿毒症物質を吸着して、便と一緒に体の外に排泄します。この尿毒症物質が身体にたまり、血液中に多くなると嘔吐や食欲低下などの症状が見られます。

Caチャンネルブロッカー…血圧を下げるお薬です。ACE阻害剤よりも血圧を下げる作用が大きいので、高血圧が見られる場合に処方されます。全身の高血圧が悪化するとひどい場合は失明したり神経症状が現れることもあります（脳や眼底の血管が切れてしまうため）。薬の効果をみるために必ず血圧を測る必要があります。

消化器作用薬…尿毒症物質が身体にたまると、嘔吐や胃腸炎がみられるようになります。これに対して、H₂ブロッカーや胃粘膜保護剤、制吐剤等が処方されます。

リン吸着剤…腎機能が低下すると尿へのリンの排泄も低下し、体に余分なリンが蓄積します。すると、ミネラルやホルモンのバランスがくずれ、骨や血管などに色々な悪影響が出ます。これをできるだけ予防するために療法食を食べてもらうのですが、それ以外にも食事のリンが吸収されないようにリン吸着剤が使用されます。

輸液…腎不全の猫ちゃんは脱水しがちなので、病気が進行してきたら病院もしくは、おうちでの輸液が必要になることが多くなります。

療法食…尿毒症物質の原因になりやすい成分をおさえた食事を取ることが大切です。色々なメーカーから腎不全の猫ちゃん用のご飯が出ているので、かかりつけの獣医師に相談してみましょう。

慢性腎不全 は予防 できるの？

2

猫の慢性腎不全は高齢期に発症しやすい病気で、完全に予防できるものではありませんが、その増悪要因として、子猫のときからの食事内容、水分摂取量、ウイルス感染症や細菌感染、尿石症、尿閉、ストレスといった様々なものが関連していることが分かっています。つまり、少なくとも**適切なワクチネーション、ライフステージにあった食事と十分な水、清潔なトイレ、室内飼いでゆったりと暮らせる生活環境**などを整え





てあげることが、飼い主として猫にしてあげられることだと思います。

定期検診が大切です

また、最低でも年に1回は定期検診（尿検査や血液検査など）を行えば、はっきりとした症状が現れる前に腎機能の悪化を見つけることができるかもしれません。老猫だから若いときほど元気がないのは当たり前と思わず、気になることがあれば、動物病院で診察を受けることをお勧めします。慢性腎不全は完治する病気ではありませんが、治療によって進行を遅らせることは可能です。

そのためにも早期発見・早期治療がきわめて大切であるといえるでしょう。少なくとも5～6歳をすぎたら定期的な健康診断をしましょう。



まとめ

慢性腎不全は家庭内看護がとても大切です。家庭では、特に以下のことに留意してください。

- ・新鮮な水をいつでも飲めるようにしましょう。
- ・トイレは猫の好みにあったものを選び、いつも新鮮に。
- ・できる範囲でストレスのかからない環境づくりを心掛けてください。
- ・獣医師に指示に従って、適切な食事を与えてください。
- ・1日のおしっこの回数や量を時々チェックしてみましょう。





覚えて
おきたい！

猫のお薬 飲ませ方&使い方テクニック

普段どんなに元気な猫ちゃんでも体調を崩すことはあります。そんな時、きちんとお薬を飲ませてあげることが、早期の治療につながります。手順をしっかり覚えて、いざという時に備えておきましょう。

錠剤の場合



1 片方の手で頭を保定し、もう片方の指先で口を開きます。



2 錠剤を口の中の、なるべく奥のまん中へ入れます。



3 口を閉じさせて鼻先を上に向け、喉をさするようにします。

粉薬の場合



1 ほっぺたを外側にひっぱり、口の中を少し広げるようにします。



2 口の中の、歯とほっぺたの間に粉剤を入れます。



3 ほっぺたを外側からもんで粉剤を唾液と混ぜ合わせます。

嫌がるコに うまく薬を 飲ませる コツ

「良薬口に苦し」といいますが、猫も人間と同じで、薬を嫌がるコはいます。たとえば錠剤だとうまく飲んでくれるけど、粉薬だとダメ、という猫や、逆に錠剤だとこっそり後で吐き出してしまふ猫など、得手不得手もあるはず。どうしてもうまく飲ませられない時には一度獣医師に相談してみましょう。

薬によっては同じ効能で、形状の異なる薬もあるので、場合によってはその猫の飲みやすい形状に変更してもらえます。

Q & A

Q 猫は泌尿器の病気が多いと聞きましたが、なぜですか？

A 本当の理由ははっきりとは分かっていません。ペットとして飼われているイエネコは、リビアヤマネコを祖先とし、猫は非常に濃縮した尿を排泄することができるように進化した動物です。もしかしたら、これによって水をあまり飲まなくても生活ができるというメリットとともに、泌尿器の病気を引き起こしやすいといったデメリットに悩まされることになったのかもしれませんが。

Q 血液検査でBUNだけが正常値より高かったのですが、腎臓が悪いのでしょうか？

A BUNは様々な要因（食事内容、脱水、発熱、ショック、胃腸での出血など）で簡単に変化してしまいますので、BUNだけで腎臓の評価をすることは出来ません。また、一度の血液検査ではわからないこともあるので、しばらく時間をおいて再検査されると良いでしょう。

Q 尿の変化について教えてください

A 尿は飲水量や体調などで変化するので、1回だけでなく何回も調べていただくのが良いでしょう。腎臓病で見られる尿性状の変化として

は、以下があげられます。

○低比重尿…濃縮が不十分な尿

正常猫では普通の生活で尿比重は1.035以上

1.025～1.030：尿の濃縮力が十分とはいえません。定期検査が必要です。

1.020～1.025：尿の濃縮力に問題がある可能性が高く、腎不全初期の可能性あります。他の腎機能検査も含めて詳しい検査が必要です。

<1.020：尿の濃縮力に明らかにも問題があり、腎不全の可能性が十分に考えられます。精密検査が必要です。

1.010以下のように極端に低い場合は腎臓病以外でもみられることがあります。例えば、食事内容や輸液、利尿剤のような薬の影響で尿比重が低くなることもあります。

○蛋白尿…ネフロンの糸球体というところで血液を濾過して尿のもとをつくりますが、この時、分子の大きなタンパク質はほとんど通過できません（もし通過しても再度血液に戻されるしくみになっています）。しかし、糸球体に問題があると通過できないはずのタンパクが、大量に尿へ漏れ出してしまうことがあります。膀胱炎などでもタンパク尿がみられることがあるので、原因をきちんと調べるのが大切です。また最近では、猫に特異的な微量アルブミン（アルブミンはタンパクの一種）というものを測定するキットもあります。

○血尿／細菌尿…一般的には尿路からの出血があると尿に血が混ざり、赤～褐色の尿がみられます。血尿がみられる原因には、単純に膀胱炎といった場合もありますが、腎臓の炎症、尿路の結石や腫瘍などの可能性も考えられます。尿路以外に全身性疾患でも血尿がみられることがあるので、血液検査や画像診断を含めて精密検査が必要です。細菌尿は尿路のどこかに感染があるときにみられます。猫の尿は本来比重が高いので尿中に細菌が繁殖しにくい環境ですが、慢性腎不全のように尿比重が低

.....

くなると膀胱に細菌が繁殖しやすくなります。お家で採取した尿では、細菌が混入しやすいので正確な判断ができません。

Q 水はどのようなものをあげればよいでしょうか？

A 水道水でOKです。あまり冷たくない方が猫は好むようです。個々の猫の好きな水のタイプがあるので、入れ物や置く場所とともに工夫をしてあげてください。

Q 同居動物がいる場合には？

A お互いが仲良しならばそれほど気にしなくても良いかもしれませんが、病気の猫の空間を大切に、食事やトイレが邪魔されないようにしてあげてください。他の動物からすぐに逃げられ安心できる場所を作ると良いでしょう。

Q 定期健診の目安を教えてください。

A 腎臓に問題があると診断されたら、以下を検診の目安に検診を受けてください。

- 血液検査や尿検査での異常が軽度で症状がほとんどみられないとき
… 4～6ヶ月毎が推奨されます。
- 血液検査の異常が進行してきたが体調は安定しているとき
… 3～6ヶ月毎が推奨されます。
- 血液検査の異常が進行し、症状が散発的にみられるとき
… 1～3ヶ月毎が推奨されます。
- 血液検査の異常が重度で、症状が常にみられるとき
… 1～4週毎が推奨されます。

気になることがあれば、動物病院へ



ずっと一緒にいたいから……



●気になることがあれば当院へご相談ください。

長崎県壱岐市郷ノ浦町田中触989-1

壱岐動物病院

TEL0920-47-6767

 **NOVARTIS**
ANIMAL HEALTH

ノバルティス アニマルヘルス株式会社
東京都港区西麻布4丁目12番24号

ノバルティス カスタマーサービス TEL.0120-162-419
月～金 9:00～12:00 13:00～17:00(祝祭日除く)